



第 003 号 2020 年 6 月 17 日 小林亮

働くということについて思う

コロナウイルス感染の世界的拡大は、多くの人の働き方やライフスタイルに変容を強いていますが、昨年、勤労生活から完全引退し郊外の自室で閑居する自分の生活は大きく影響を受けていません。元々、仕事を通した自己実現や社会貢献に過度な価値を見出しておらず、組織内での権力や華美な消費にも関心がなかったため、慎ましい生活を支える環境が整えば、早く後進に席を譲って引退したいと欲していたのです。18 世紀の哲学者、ヴォルテールは仕事の効用は、退屈(Boredom)、道楽(Vice)、必要性(Need)の3つの悪徳を退けることだと言っています。それならば、必要な資源を保有し、他人に迷惑をかけない道楽で退屈しない状況では、特に働く必要もないと考えたのです。

職業観は人によって異なります。仕事を通して築かれる交流やネットワークが人生を豊かにすることに異論はありませんし、社会を動かすために労働と職業倫理が必要なことは確かです。今般のコロナ禍で生産活動が大幅に減少し、仕事の間を離れる人も多く、生活維持のため、財政出動による大規模な所得の再分配が行われました。AI が多くの人の仕事を奪う未来も展望される中で、コロナが突きつけた新しい現実には、いかに多くの人の働かないという選択を許容し公正な社会を維持するかを考える機会になったように思います。

小林亮(無職)

2020 年 6 月 5 日